

| | |
|-------|--|
| 研究テーマ | 【 I 造形教室で培う力を考える 】 地域に根付いた伝統工芸の制作を通して、美術に愛好することのできる題材の工夫 ～第 3 学年 「篆刻制作の実践」を通して |
|-------|--|

古河市立古河第一中学校 教諭 飯塚 真司

1 研究テーマについて

普通の授業を振り返ってみると、美術に関して学んだことや造形活動が普段の生活の中でどのような役割を果たしているかに気付かない生徒がたくさんいるように感じた。そのため「美術」の授業が特別な存在になってしまっているのが現状である。美術が「特別な存在」ではなく「身近な存在」であるためには、現在に至るまでの歴史や、その歴史がどのように発展してきたのか、身近な生活の中にどれだけ生かされているかを知ることが必要である。

本校での「篆刻」の授業は、古河市内にある「篆刻美術館」から指導員 2 名を派遣して頂き、技術の指導を受けている。出来上がった作品は篆刻美術館に展示され、生徒自身も達成感を味わうことができている。しかし、その授業のなかで篆刻の歴史を取り上げたとしても、どれだけの生徒が身近な生活の中に「篆刻」が生かされていると気付けるか、疑問を感じる。

そこで、幅広い伝統的美術作品について鑑賞しながら「歴史や伝統文化」と「現代」がどう関係しているかについて知った上で、篆刻の「歴史」が「現在」にどう生かされているかについて触れていくことにした。

2 実践例

(1) 題材名 卒業制作 ～篆刻 自分の印鑑をつくろう～

(2) 目 標

- ・歴史や文化に触れ、意欲的に制作に取り組もうとする。 (関心・意欲・態度)
- ・鑑賞や参考作品から発想を広げ、できあがりや形を見通しながら構想を練っている。 (発想・構想の能力)
- ・素材の特徴を理解して、さまざまな道具を工夫して使い、丁寧に彫りを進めている。 (創造的な技能)
- ・参考作品や、友人の作品を鑑賞し、作者の思いや作品の良さ、美しさを感じ取っている。 (鑑賞の能力)

(3) 題材について

本題材は、中国の伝統的な文化であり、篆刻で使われる「篆書体」は日本でもいろいろなところで使われている。代表的なものをあげると、日本旅券（パスポート）の表紙に使われているものが篆書体である。「歴史」と「現代」がつながることで美術が身近な存在だということに気付くことができる題材である。また印鑑の紐（ちゅう＝印のつまみの部分）に彫刻を施し、仕上げに石独特の模様が現れるまで磨き上げて完成させていくことは、忍耐力を必要とするが、達成感もおおいに味わえるので、中学生の美術学習にふさわしいものである。また、古河市内には日本で唯一の篆刻美術館があり、郷土に根付いた学習をすることができる。

(4) 題材と評価基準

| 美術への関心・意欲・態度 | 発想や構想の能力 | 創造的な技能 | 鑑賞の能力 |
|-----------------------------------|---|--|--|
| 美術の歴史と現代の関係性を知り、身近なものに興味をもととうとする。 | 篆書体の特徴を理解し、太さやバランスなどを注意しながら、美しい文字に構成しようとしている。 | 印材の特徴を理解し、自分の思い描く字になるよう、道具をうまく使いながら制作している。 | 美術の歴史や古河に根付いた伝統への関心を高めて、伝統工芸の良さを感じ取っている。 |

(5) 指導と評価の計画 ※○字は時数

| 時間 | 学習内容・活動 | 評価基準・【評価方法】 |
|----------|--|---|
| 第1次 ① | ・歴史的な作品と現代とのつながりについて知る。篆書体の辞書を引きながら、自分の名前の漢字を一字選び、筆ペンを使って篆書体を書く。篆書体の特徴や形の面白さなどを知る。(本時) | ・歴史的な美術作品と現代のつながりについて、興味をもちながら鑑賞している。 【観察】 ・篆書体の特徴を理解しようと、試行錯誤しながらアイデアスケッチを進めている。 【観察・ワークシート】 |
| 第2次 ④ | ・制作する漢字を決定し、鉛筆やマジックペンを使いながら下書きを書く。マジック転写という方法で、下書きを印面に写す。 ・印刀や印床を使いながら印面を彫る。 ・彫り終えた作品を押印する。訂正箇所があれば訂正し、再び押印する。 | ・篆書体の特徴を捉え、線の太さやバランスなどに注意しながら下書きを進められている。 【観察・ワークシート】 ・指導員の支援を受けながら、道具類を安全に取り扱い、自分の思い描く作品になるよう丁寧に制作を進めている。 【観察・作品】 ・自分の思い描く作品になったか確認し、より良いものにしようと意欲的に取り組んでいる。 【観察・作品】 |
| 第3次 ② | ・押印しやすい紐(持ち手の部分)を考えながらヤスリを使い、形を整える。 | ・資料集や参考作品を見ながら、押印しやすい形を考え、紐の部分を整えている。 【観察・作品】 |
| 第4次 ① | ・完成した作品を一覧票に貼り、自分の作品と友人の作品を鑑賞する。 | ・押印した作品や印材の紐の部分の造形的な形など、お互いの良さを認め合いながら鑑賞している。 【観察・ワークシート】 |

(6) 本時の展開

◇目標

篆刻の歴史を知り、意欲的に印字をスケッチできる。

◇準備・資料

参考資料・ワークシート・インテリジェントプロジェクター・筆ペン

◇展開

| 学習活動・内容 | 指導上の留意点（評は評価） |
|---|---|
| <p>1 本時のめあてを確かめる。 篆刻の歴史に触れてみよう。</p> <p>2 歴史的な作品を鑑賞する。 (1) いくつかの作品を鑑賞し、普段の生活との関連を知る。 ①パルテノン神殿</p>    <p>②サモトラケのニケ</p>   <p>3 篆刻の歴史に触れる。 (1) 古河市篆刻美術館について (2) 篆刻の歴史について (3) 篆刻の作品について</p>  <p>4 自分の名前から字を選び、下書き（印稿）をする。 ①辞書を使い、書体を調べる。 ②筆ペンで下書きをする。</p> <p>5 本時のまとめ (1) グループ内で、お互いの文字の良さを認めあう。 (2) 自己評価する。</p> | <p>・本時の学習課題を明確にし、学習への意欲を確かめる。</p> <p>・プロジェクターで作品を提示し、芸術作品が現在の生活にどう溶け込んでいるかを説明する。</p> <p>・生徒に問いかけながら、歴史的な作品と現代との関連がつかめるようにする。</p> <p>・鑑賞が苦手な生徒にも、興味関心が湧くように身近なものを提示する。</p> <p>・篆刻美術館について触れ、古河市の伝統工芸について関心をもてるようにする。</p> <p>・篆刻が今の生活にも活用されていることを提示し、意欲的に取り組めるようにする。</p> <p>・篆刻特有の書体を学び、その特徴が理解できるように支援する。</p> <p>・筆ペンやネームペンを使い、特徴が生かされた文字が書けるよう支援する。</p> <p>※書体を真似しようとするのではなく、特徴を理解したうえで自分なりの形になるよう助言する。</p> <p>・うまく書けない生徒には、あまり上手に書くことは意識させずに特徴を表現するよう助言する。</p> <p>評：書体の特徴を理解し、自分らしい形で文字が書けたか（ワークシート）</p> <p>・友人の文字の良いところを探し、評価するよう助言する。</p> |

3 成果と課題

【成果】

- 授業の導入の段階で、コンピュータ機器を使い歴史的な建造物や芸術作品を鑑賞したことで、生徒の興味関心を引くことができた。パルテノン神殿に関しては、「この建物知ってる。」「社会で習ったね。」などという声を聞くことができた。また、パルテノン神殿が車のデザインや「ユネスコ」のロゴマークになっていることを知ると「すごい！」や「ユネスコってなんだっけ？」など、興味を広げることにもつながった。サモトラケのニケについては、作品についてあまり知っている生徒は少なかったが、「ナイキ」のロゴになっていることを知ると、一気に生徒の興味が高まった。靴やかばんなど普段から身につけることが多いメーカーなので、「オレが履いているスニーカーはニケだ。」や「なんかいろいろなところに使われてるんだね。」などといった声が行き交う様子が見られた。

篆刻の歴史については、小学校の時に一度体験している生徒もいたので、新鮮な気持ちで、興味関心が湧かない様子だったが、日本旅券（パスポート）の表紙に「篆書体」が使われていることを知ると、「おー！」という歓声があがった。

- 授業では、縦 1.5 cm×横 1.5 cm×高さ約 5 cmの大変小さい印材を使い制作した。非常に制作しにくい様子が見られたが、篆刻美術館から講師の先生に来ていただき、細かな指導をすることができた。印面の制作時間が2時間しかなかったため、今回は白文（文字の部分が白くうつる技法）を制作したが、「今度は朱文（文字の部分が赤くうつる技法）を作りたい。」という声が聞こえてきた。

また紐の部分に関しては、大変小さな印材だったので、形の追及ではなく持ちやすさを意識して制作した。彫刻刀やヤスリなどを使い、手で持った時の感触や押印のしやすさなどを追及することができた。

- 今回の篆刻制作は、卒業制作として行った。作品は、3月から4月にかけて古河市の篆刻美術館に展示され、家族の方や一般の方々に見て頂くことができた。授業の中で作品を作り、クラスや学校内で展示を終わらせずに、幅広い方々に作品を見て頂いたことは、生徒たちの達成感につながったのではないかと考える。

【課題】

学習の目標であった、美術が「特別な存在」ではなく「身近な存在」に変化したか考えると、残念ながら美術が「身近な存在」と感じると答えた生徒は少なかった。しかし、歴史的な建造物や芸術作品が身近なところに生かされていることを知り、とても楽しかったと答える生徒が多く見られた。

卒業制作として篆刻を制作したが、授業の中で生徒が満足いく作品を仕上げた生徒が少なかった。原因としては、準備した印材が小さかったことと紐の部分の制作時間が少なかったことが考えられる。もう少し大きな印材を用意できれば、白文ではなく朱文の制作を行えるのではないかと考えられる。しかし朱文の制作は篆刻制作の経験が必要になってくるので、制作時間を確保し篆刻制作の経験を積ませなくてはならない。制作時間の確保も考え篆刻制作の在り方を考えなければならぬと感じた。

また、篆刻美術館と連携しながら卒業制作として作品を制作する時期や期間など見直していき、生徒が満足いく作品を仕上げられるような指導計画が必要だと強く感じた。